

平成18年度

第1回「SYDボランティア奨励賞」受賞者名簿



後援：文部科学省、駐日フィリピン大使館
社団法人青少年育成国民会議
社団法人中央青少年団体連絡協議会
財団法人日本レクリエーション協会
社団法人日本青年奉仕協会
社団法人日本キャンプ協会

受賞者一覧

(敬称略・順不同)

文部科学大臣賞

- 京都市立京都御池中学校 (京都府)

優秀賞

- 【小学生の部】 鏡石町立第一小学校 (福島県)
- 【中学生の部】 庄原市立東城中学校 生徒会 (広島県)
- 【高校生の部】 該当なし
- 【一般の部】 合同ボランティアネットワーク (神奈川県)

特別賞

- 国崎 翠・吉居夏奈 (北海道)
- 美幌町青少年育成協議会 (北海道)
- 喜多方市立山都第一小学校 第6学年 (福島県)
- 熱海市立小嵐中学校 (静岡県)
- 加藤ひとみ (岐阜県)
- 伊江村立伊江中学校 (沖縄県)

SYDは、文部科学省所管の社会教育団体です。青少年の健全育成を中心とした様々な活動を行っており、1906年、東京府師範学校(現在の東京学芸大学)に学ぶ蓮沼門三を中心とする青年たちによって創立されました。“愛と汗の実践”を理念として「心の教育」一筋に歩み続けて101年、今、みんなの幸せを願う「幸せの種まき運動」を全国的に展開しています。

文 部 科 学 大 臣 賞

■ 京都市立京都御池中学校 (京都府)

京都御池中学校3年生は、2年生の時、「南北問題」について学習した。3秒に1人、世界のどこかで飢えに苦しみ死んでいく子どもたちがいることを知ったとき、生徒の中から「僕らに何かできひんかなあ」と声があがった。

3年になった6月、6人の生徒が動き出した。彼らはアルミ缶を集め、それを換金し、貧困に苦しむ子どもたちのために送りたいと言った。そんな時に「神の子たち」のビデオに出会い、フィリピン・パヤタスのゴミの山で暮らす子どもたちを支援したい、ということになった。

学年集会で3年生の生徒へ協力を呼びかけるとともに、1・2年生や保護者、地域の方々へもアルミ缶の回収をお願いした。同時に家で眠っている文房具や学用品を子どもたちへ贈る活動も始め、集めた文房具等は、この夏、SYDを通じてフィリピンへ届けた。

さらに何か出来ることはないかと考え、総合的な学習で取り組んでいた京都の伝統工芸のひとつである「漆工芸」について学び、「漆を使った商品の開発」カリキュラムを発展させ、開発した商品を実際に生産・販売し、その収益金をフィリピンへの支援金にあてようと動き出した。

最初は漆を使った商品を売る話だったが、他に商品を作ったり、京野菜や食べ物を売ってみよう、と話が広がり、11月に地域のフェスティバルに合わせてバザーを開催する事になった。

また10月の文化祭では、「神の子たち」をベースに、3年生の女子生徒と、地域の演劇に関わっておられる方が脚本を作り、「アルミ缶の歌」という劇を披露した。劇の最後に子どもたちが歌う「アルミ缶の歌」が客席に響く様は、本当に印象的であった。劇では魔法の力を借りていても、いつか自分たちの力で支援する、という力強い思いが伝わってきた。

11月、バザーを実施し、3年生一人一人が一生懸命取り組み、アルミ缶の収益金と併せて375,205円を支援金としてSYDに渡すことが出来た。

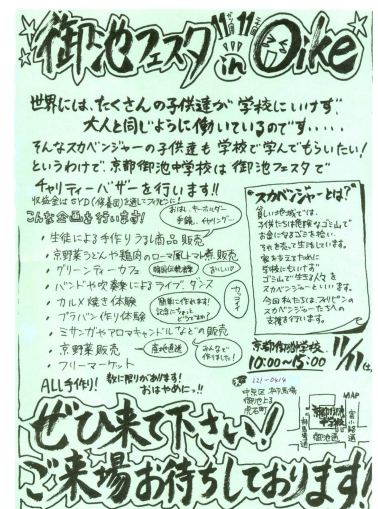
現在もアルミ缶の回収は続いている。みんなの思いがパヤタスの子どもたちの幸せにつながることを願って今後も取り組んで行きたい。



<7月に始まった空き缶回収・つぶしの様子>



<空き缶集計ボード>



<バザーのチラシ>

優 秀 賞

【小学生の部】 鏡石町立第一小学校 (福島県)

校長先生が始めた落ち葉掃きは、児童のボランティア活動として定着し、今年で5年目になる。4年生以上の有志がボランティア隊を結成、今年も約100名が集まり、10月半ばから11月末までの1ヶ月半の落ち葉掃きボランティア活動を行った。

ボランティア隊に入ると黄色いスカーフが配布される。「この黄色いスカーフは、ボランティア隊の誇りです。やめたいと思ったらすぐにスカーフを返してください」と話す。実際毎年途中で何人かが返納に来る。

児童は「ありがとう」「よくやっているね」と言われることがうれしいと言う。しかし感謝されることを期待しての活動は続かない。賞賛されることが目的の活動では心が育たない、と考え「ボランティアは人のためではなく、自分を高めるためにやろう」と話し、様々な形で指導している。

6年生の作文を見ると、ボランティアを通して自分が成長したことに気づき、素直に喜ぶ様子が書かれている。また、児童と一緒に落ち葉掃きをした教員からも「寒さの増す中の毎朝の落ち葉掃きは、正直負担に感じることもあったが、児童のがんばる姿に励まされたように思う」と、児童だけでなく、教員の意識も変わってきた。

落ち葉掃きボランティアが始まって5年、毎朝の子どもたちのがんばりに教員も頭が下がる。また上級生の働き振りを見て下級生が「次は私の番」と待っている。来年度も新たなメンバーが黄色いスカーフを巻いてくれる事と思う。



＜黄色いスカーフを腕にまき落ち葉掃き＞

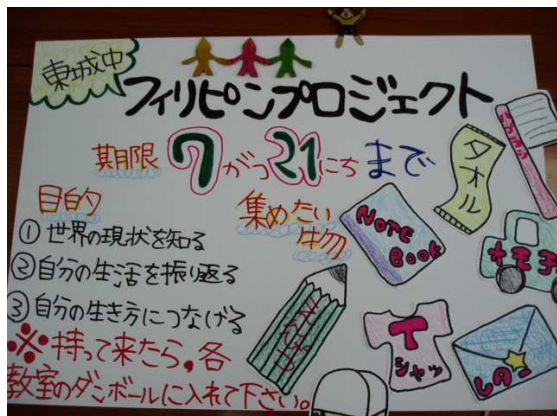
【中学生の部】 庄原市立東城中学校 生徒会 (広島県)

東城中学校から、3年連続でSYDの「青年ボランティア・アクションinフィリピン」に参加している。毎年フィリピンに行くにあたって全校で道徳の時間にフィリピンの現状について学んだり、生徒会が協力して、学校や地域全体に支援物資の提供(収集)を呼びかける活動を行っている。SYDの活動と合わせて行っているこれらの活動が「東城中フィリピンプロジェクト」である。今では学校だけでなく、地域の大きな特色ともなっている。

- ①「フィリピンプロジェクト」の実施：平成18年度は、生徒会と学級委員会が中心となり、生徒・保護者、地域の方々に物資の収集を呼びかけ、1100点以上の物資が集まった。
- ②「フィリピンに関わる道徳授業(国際理解)」の実施
- ③SYD「青年ボランティア・アクションinフィリピン」参加：一昨年は先生が、昨年・今年と生徒会長が事業に参加、実際にフィリピンのゴミ山で暮らす子どもたちと交流した。

- ④「文化祭」での取り組み発表とその準備：より多くの人たちに、フィリピンの現状を知ってもらうため、帰国後、今までの取り組みをまとめ、生徒朝会等での体験発表、機関紙への投稿等を行い、11月の文化祭で発表した。「生徒会発表ではフィリピンの事について、いろいろなことが解ってよかった」「本当の豊かさについて考えることができた」と他の生徒にとっても心に残る発表が出来た。

今後もこの活動を通して「見てきたこと」「知ったこと」「世界の現状」を地域・県内・全国の人に伝えていきたい。



＜フィリピンプロジェクトの呼びかけ＞



＜フィリピンでの交流の様子＞

【一般の部】 合同ボランティアネットワーク (神奈川県).....

首都圏の中学校・高校に通う様々な学校の生徒が一同に集まり、様々なテーマについて話し合い、活動している「生徒協議会」という組織の中で、ボランティアについて話し合い、実際に活動が出来る場が欲しい、と「合同ボランティアネットワーク」通称「合ボラ」が誕生。

合ボラは、首都圏の様々な中学・高校のボランティアを志す生徒が集まり、ボランティア活動を自分たちで企画・実行・提供してゆく自主的な組織で運営も中・高生が行っている。

主な活動：由比ヶ浜清掃・多摩川河川敷清掃を年2回計4回主催(由比ヶ浜は通算11回・多摩川は13回)毎回80人～100人の中・高生が集まる。その他、自閉症の子どもとのサマースクールへの参加、あしなが学生募金への協力他。

行政側から高校生に対して、ボランティアの単位化、ボランティアパスポートの配布等で積極的な参加を呼びかけ、ボランティアへの関心を抱く高校生が増えているが、その環境や情報が整っているとは言えない。

今後の活動は中・高生にボランティアを提供する機関として、①主催活動の質を高める、②自分たちを知ってもらうための広報活動を強化する、③自分たちも様々なボランティアに参加し情報提供をする、を目標に活動をしていく。



＜由比ヶ浜清掃の様子＞

特 別 賞

■ 国崎 翠・吉居夏奈 (北海道)

昨夏、SYD「青年ボランティア・アクションinフィリピン」に参加し、ゴミ山で働く子どもたちと交流してきた。廃材で作られた小屋のような家に家族で暮らし、ゴミを拾って生活をしている子どもたちを目にし、恵まれた自分たちの生活と比べ、自らの生き方、考え方を見直し、本当の意味での豊かさ・幸福とは何かを突きつけられた。現地で「貧しいけれど家族が一緒だから幸せ」と言った5歳の女の子の笑顔が忘れられなかった。

そんなストリートチルドレンのことを知り、自分たちに何が出来るかを考え、彼らの現状を多くの人に知ってもらうため、登別のショッピングセンターで写真展を開催した。予想以上にマスコミに取り上げられ、多くの人に写真を見てもらうことができた。

さらに、この写真展を見た室蘭の団体から、室蘭市民にも見せてほしいと依頼され、室蘭活動センターで写真展を開催することになった。

この写真展もマスコミに取り上げられ、多くの人が会場に足を運んでくれた。室蘭市長も見に来てくれ、地元の高校生は支援袋を学校で作ると言ってくれた。特に声かけはしなかったが、会場に設置した献金箱に献金が集まり、また写真展を見た人がフィリピンの子どもの学資支援を申し出てくれたり支援品の協力をしてくれた。

今後も写真展を通じて、フィリピンの貧困と共に生きる子どもたちのことを伝えていきたい。



<写真展の様子>



<工夫して展示しました>

■ 美幌町青少年育成協議会 (北海道)

23年前に発足、「地域の子どもは、地域で育てる」を合言葉に、「地域のおじさん、おばさん」を進めている。同時に「青少年サポートチーム」を結成。白いジャンパーを作り町内のパトロールを始めた。現在、メンバーは60名以上に増え、青色回転灯装備車によるパトロール活動を実施している。

ボランティアのパトロールに参加できる人数は限られているので、地域全体に広がるように「子ども見守り隊」を結成。メンバーは、外出時に黄色の缶バッジをつけ、不審者等を見つけたら通報する、という活動。地元紙などに入隊を呼びかけたところ、結成時に用意した1000個のバッジはなくなり、追加で1000個を作成した。結果、美幌町の成人の約1割がこのバッジをつけている事になる。

地域の大人が、地域の子どもを《みんなの子ども》と考えて、「地域のおじさん、おばさんになり、《おはよう》《こんにちは》《ありがとう》を積極的に伝え、事故や犯罪から守り、子どもたちの相談相手にもなってあげたい」と活動を続けている。

最終的に目指すところは、サポートチームのジャンパーや見守り隊のバッジがこの町からなくなり、みんなが安心して暮らせる町づくり。



＜青少年サポートチーム＞



＜子どもみまもり隊＞

■ 喜多方市立山都第一小学校 第6学年 (福島県)

平成18年7月7日、総合学習の時間にSYDの《出前事業》を受けたのをきっかけに、今私たちに出来ることはないか学級で話し合い、4つの校内ボランティア活動を始めることにした。

- ①朝の挨拶運動：玄関に当番の6年生が立ち、登校してくる下級生に「おはようございます」と元気に挨拶する。
- ②落ち葉掃き：校庭の桜の木の下と職員玄関前の落ち葉掃除。いつも8人から10人が担当。
- ③体育小屋の整理整頓：サッカーボールやカラーコーン等を片付ける。2人か3人が担当。
- ④廊下にある本棚や雑巾掛けの整理整頓：そうきんが床にちらばっていたら掛け直し、掃除用具入れも道具が揃っているか調べる。

最初はほとんどの人が挨拶をししてくれなかったけれど、4ヶ月たった今ではほとんどの人が挨拶をしってくれるようになった。

この活動が始まって2ヶ月がたったころ、先生から「学校の外に活動をひろげられないかな」と言われ、みんなでアイデアを出し合い、山都町にある高齢者福祉施設「ケアホームやまと」を訪問することになり、10月12日、6年生21名でホームを訪問、車椅子の掃除やお年寄りとの交流をした。

ボランティア活動を通じて、「自分のおじいちゃんともよく話をするようになり、手伝いも進んでするようになった。」「朝の挨拶を何でしなくちゃいけないんだろうと最初は思っていたが、挨拶って大事だなあ」と児童の意識が変わり、活動に対する意欲が高まった。



＜朝の挨拶運動＞



＜施設で車椅子の清掃＞

■ 熱海市立小嵐中学校 (静岡県)

2005年1月、「小嵐の森」を語るシンポジウムが行われ、国連WAFUN！F親善大使の田中章義氏との出会いが「ストリートチルドレン」との関りの始めであった。生徒たちは地球上から1秒間にサッカー場一面分の緑が失われていること、フィリピンの15歳のストリートチルドレンが描いた「将来自分が住みたい家」が「生まれてから今までで一番安全な場所だから」という「お母さんのお腹の中」の絵の説明を聞き、心が揺り動かされた。

後日、「ストリートチルドレン芸術祭」への参加要請もあり、世界で苦しんでいる同世代のストリートチルドレンのために自分たちでも何かできないか、と教員と生徒でプロジェクトチームを作り、ストリートチルドレンへの手紙の返信、小嵐の森の枝や小石を使った額縁やお守りを作ってストリートチルドレンへプレゼントしたり、世界のストリートチルドレンマップの作成などの活動をしている。また、「ストリートチルドレン芸術祭チャリティカレンダー」の絵の収集先となり、その絵画を学校内に常設展示している。

近隣の小・中・高等学校とも連携し、絵画展・活動発表会を行うなど、地域の他校も巻き込み、その活動の輪は広がっている。

生徒たちは、「2005年はストリートチルドレンとの出会いの年、2006年はストリートチルドレンとの絆を深める年。自分たちの出来ることに精一杯取り組もう」と目標をたて、「ストリートチルドレンとの交流の輪を広げ、彼らの心の支えになりたい」という願いを胸に、全校一丸となって今後も活動が続けて行きたい。



＜ストリートチルドレンの絵画が寄せられた国を世界地図上に示す＞



＜2007年版チャリティカレンダーの表紙＞

■ 加藤ひとみ (岐阜県)

自身が脳性麻痺による障害のある身ではあるが、自身の2冊目の著書「笑顔の零」の印税を基に「笑顔の零基金」を設け、中国の重度肢体不自由児への幸せのお裾分け支援を11年前から開始。

1992年、中国残留日本人孤児の青年により、1冊目の著書「悲しみも苦しみもありがとう」が中国語に翻訳され、それが中国で出版される事になり「外国へは行った事がないし、行ってみたいな」とふと口にした事が、翌年5月の訪中となった。そのとき北京市の中国リハビリ研究センターを訪問。そのリハビリ施設は中国にたった一つしかなく、また病気や事故で途中から障害者となった者には手厚い援助があるが、生まれつきや生まれて間もなく障害者となった者への援助は殆ど無いことを知った。また聴覚・視覚・知的障害児の養護学校は地域毎にあるのに、肢体不自由児の為の養護学校も、派遣教師制度も無い事を知った。

そんな中国の実情を肌で感じ、早期に治療やリハビリが受けられたら自立の可能性があるのでは、一人でも二人でも、貧困家庭の肢体不自由児を助けたい、と思い活動を始めた。

現在は、4名の貧困家庭の肢体不自由児を中国リハビリ研究センター内の博愛医院に入院させ、リハビリを受けさせている。

幸せのお裾分け、新たな道作りは、まだまだ続く。



＜北京市中国リハビリ研究センターの前で＞



＜近慶県大榆樹村の援助児自宅前、中央が加藤さん＞

■ 伊江村立伊江中学校 (沖縄県)

平成17年度の2学期の「総合的な学習の時間」で“異文化理解”と“国際協力の意義”に重点をおいて「国際理解学習」に取り組んだ。この学習のまとめとしてSYDの講演会と支援活動の実践を行った。

講演会の感想として生徒たちは「悲惨な生活状況の中でも笑顔や人を思いやる優しさを決して忘れないフィリピンの子どもたちに感動した」「フィリピンで貧しくも明るく暮らしている子どもたちから笑顔の大切さや思いやりの心を持つことの大切さを教えてもらった」と述べていた。

このことから、生徒たちはフィリピンの子どもたちを少しでも喜ばせたい、支援したいという気持ちから「子ども支援バッグ」を全員が手縫いで作成し、励ましのメッセージを添えて、各家庭から持ち寄った学用品や洋服などを入れた支援袋を完成させた。

愛情の詰まった支援袋が出来たのも、生徒自身にボランティアの精神が芽生え、支援する側、される側が共に喜びに満たされた、という感情が湧いたからこそ。

今後とも「総合的な学習の時間」だけにとどまらず、道徳的な面からもフィリピンの子どもたちとの関わりを持って行きたい。



＜開発途上国について調べたことを発表＞



＜支援袋を一人一人の生徒が手縫いで作成＞

SYDボランティア奨励賞 実施要項

財団法人修養団では、昭和57年より平成13年まで「蓮沼門三社会教育奨励賞」により多くの優れた社会教育活動を実践した個人、グループ・団体を顕彰して参りました。この実績を踏まえ、創立100周年を記念し、新たに「愛と汗の精神」を信条とする《幸せの種まき運動》の実践者を顕彰する「SYDボランティア奨励賞」を設置しました。

主 催：SYD（財団法人修養団）

後 援：文部科学省、社団法人中央青少年団体連絡協議会、
社団法人青少年育成国民会議、社団法人日本青年奉仕協会 他

1. 趣 旨

今日、次代を担う青少年の健全育成はますます重要な課題となっている。そこで、ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげたグループや個人を顕彰することにより、青少年のボランティア活動を促進するとともに、活動の習慣化を図り、生きる力や豊かな心を育むなど青少年の健全育成に寄与する。

2. 対 象

原則として、ボランティア活動を実践している学校（生徒会、クラス、クラブ等）やPTA、子ども会等のグループ及び個人

3. 選考基準

次の項目に該当し、高い評価を得られたもの

- (1) ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげ、今後の活動に期待のできるもの
- (2) ボランティア活動に創意工夫や新しい方策を取り入れ、新機軸を拓き、今後の活動に期待のできるもの
- (3) ボランティア活動を受け入れ、施設の利用、改善、充実に努め、活動の活性化に寄与している施設またはそれを推進する活動
- (4) 青少年の健全育成を目的としたボランティア活動を実践し、将来が期待されるグループ及び個人

4. 選考方法

学識経験者等8名に選考委員を委嘱し、選考委員会にて決定する。

5. 表 彰

文部科学大臣賞 1点

クリスタルトロフィー (表彰状)、副賞 (活動奨励金20万円またはSYD「青年ボランティア・アクション in フィリピン」へ2名招待)

優秀賞 4点 (小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部)

クリスタルトロフィー (表彰状)、副賞 (活動奨励金10万円)

特別賞 数点 (小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部)

クリスタルトロフィー (表彰状)、記念品

6. 贈 呈 式

期日:平成19年2月11日 (平成18年度)

会場:SYDホール

7. 募集方法

都道府県教育委員会、社会教育団体、青少年団体、学識経験者およびSYD組織、関係者に推薦を依頼するとともに、新聞、雑誌等のマスコミに広報を依頼する。

8. 応募方法

所定の様式に必要事項を記入し、活動報告書の上に添付して下記まで送付する。

9. 締め切り

平成19年1月10日 (平成18年度)

10. 申込み・問合せ先

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-25-2

TEL:03-3405-5441 FAX:03-3405-5424

E-mail:info@syd.or.jp <http://www.syd.or.jp/>

SYDボランティア奨励賞 係

選 考 委 員

國分 正明 ([財]修養団理事長)

山崎 一紀 ([財]修養団専務理事)

明石 要一 (千葉大学教授)

大野 曜 ([財]日本女性学習財団理事長)

仲野 好重 (大手前大学教授)

長沼 豊 (学習院大学助教授)

山口 恒人 (全日本中学校長会事務局長)

山田 一功 (山梨県PTA協議会会長)



SYD『幸せの種まき運動』とは

—みんなでまこう！幸せの種—をスローガンとして、まわりの人々に、社会に、一粒でも多くの‘幸せの種’をまいていこうという運動です。さりげなく、よろこんで、出来るだけ‘幸せの種’をまいていきましょう。種をまくときは、あなたの“笑顔”という栄養分を添えて！

《三つの‘幸せの種’》

- ☆こんにちは！という‘ふれあいの種’
- ☆ どうぞ ！という‘思いやりの種’
- ☆ ありがとう ！という‘よろこびの種’